青いパーカーの男

――一幕五場

《登場人物》

健一　会社員、俊太の父
俊太　大学三年生

美由紀　会社員、祐司・玲香の母
祐司　大学四年生
玲香　大学二年生

1

一般家庭の居間兼食堂。中央にダイニングテーブルと四脚の椅子。上手にソファーがあり、その前に小さなテーブル。下手に肘掛け椅子が一脚ある。中央奥に出入り口があり、台所につづいている。出入り口の左右は壁で、飾り棚がある。上手奥には二階に上がる階段がある趣き。下手には玄関につながるドアがある。

幕が開くと下手の肘掛けに若い男（祐司）が座って、スマートフォンをいじっている。椅子中央出入口からワゴンを押した母の美由紀が登場し、ワゴンの上の皿などをテーブルに並べ始める。ワゴンの上には大きな鍋が置かれている。そこに上手から若い女（玲香）が登場する。

美由紀　今日はカレーにしたわ。
玲香　（席に着きながら）わざわざ言うほどのことでも。
美由紀　今日のカレーはちょっと豪華よ。いつもよりスパイスを効かせたし、エビもホタテもふんだんに入れたから。
玲香　海鮮スパイスカレー？
美由紀　まあ、そういうことね。（祐司に）御飯だからスマホはやめて。

祐司はとくに返事をすることもなく、椅子から立ち上がり、テーブルの席に着く。美由紀は各人の皿にカレーを盛り、自分も椅子に腰掛ける。それぞれが座る位置や向きは演出による。

祐司　（食べる前に匂いを嗅いで）確かに、ちょっと香りがいつもと違うな。クミンの香りがする。
美由紀　当たり、よく分かったわね。
玲香　お兄ちゃん、スパイスに詳しいの？
祐司　一時カレーに凝ってた。専門店めぐりもしてたよ。
玲香　へえ、知らなかった。でも、美味しそう。頑張ったんだ。

美由紀　まあね。新しい家族になって最初のカレーだから。
玲香　そう言えば、おとう……さんは、まだかしら。
美由紀　今日は七時頃には帰れるって言ってたわ。
玲香　そう。じゃあ、もうすぐってことね。
美由紀　でも、カレーが冷めちゃうから、先にいただいてましょう。
玲香　そうね、じゃあ。

三人はいただきますを言って、食べ始める。以下の会話は適当に食べながら続けられる。

祐司　今日は割と早いんだ。
美由紀　仕事がやっと一区切りついたみたい。なかなか一緒に食べれなかったものね。
祐司　晩ご飯をみんなで食べるって、初めてだな。
玲香　そうね。でも先週も一回、三人で食べたよ。その時はお兄ちゃん、コンパがあるって遅かったけど。
祐司　ああ、月曜か。
玲香　うん、その日。三人で食べた。八宝菜だった。
美由紀　美味しいって、たくさん食べてくれたわ。

玲香　嬉しかった？
美由紀　そりゃあね。せっかく作ったんだから。
（声）　ただいまー。

声につづいて下手から中年の男性が登場する。健一である。美由紀が立ち上がって下手に行き健一を迎える。

美由紀　おかえりなさい。
健一　ああ、ただいま。（祐司と玲香に）みんなも、ただいま。
祐司・玲香　（ややぎこちなく）あ、お帰りなさい。
健一　今日は夕飯に間に合ったようだな。
美由紀　今食べ始めたところよ。もうちょっと待とうかとも思ったんだけど。
健一　いや、いいよ待たなくて。今日は皆で食べる初めての夕飯ということになるかな。
美由紀　今そのことを言ってたの。

健一は一旦着替えのために、上手に退場する。美由紀は席に戻る。
祐司・玲香が食べるのを止めているのに気づく。

美由紀　別に食べるのを止めなくていいわよ。
祐司　あ、そうだな。
玲香　なんか、ちょっと改まっちゃった。
美由紀　まあ、それも分かるけど。

三人はまたカレーを食べ始める。すぐに背広とネクタイを取ってカーディガンを羽織った健一が上手から戻ってくる。

健一　（席に着きながら）うまそうなカレーだな。いい香りがする。
玲香　ママが腕によりを掛けて作ったの。
健一　それはきっと絶品だな。美由紀の得意料理なのかな。
美由紀　カレーに得意も不得意もないわよ。何を入れるかだけよ。
健一　それはそうだな。でも入れるものに創意が現れるんじゃないか？
美由紀　それで美味しくなっていたらいいけど。
健一　（一口食べて、親指を立てる）グッドだよ。
美由紀　よかったわ。そう言ってもらえて。
玲香　大体いつも、グッドって言ってるよね、……お父さん。

健一　玲香ちゃんがお父さんって言うの、初めて聞いたかな。嬉しいよ、そう呼んでもらえて。……（祐司と玲香に）前のお父さんのことは、何て呼んでたんだい？

玲香　私はパパって、言ってたかな。

祐司　俺は、お父さん、かな。やっぱり。

短い沈黙が流れる。

美由紀　まあ、あの人のことは、今は置いといて。

健一　まあ、そうだな。これからは俺が二人の父親ということだから。……あらためて、よろしくな。……やっぱり、四人で食べると、にぎやかでいいな。

美由紀　そうね、四人で夕御飯を食べるなんて、久しぶりだわ。

祐司と玲香は曖昧にうなづく。四人はしばらく無言で食事をつづける。

健一　（思いついたように）ああ、言うのを忘れてたけど、今日はちょっと伝えることがあるんだ。

美由紀　何かしら？
健一　大したことじゃないだが、今日俺の息子の俊太が来るんだ。
美由紀　へえ、そうなの。何時？
健一　今日中に着くって言ってた。
玲香　（美由紀に）俊太、さんって、……私たち、まだ会ってないよね。
美由紀　そうね。結婚式にも来られなかったから。私もまだだわ。
祐司　（健一）いつもはどこにいるんですか？
健一　名古屋だよ。そこの大学に行ってる。色々忙しくしてて、結婚式の時も、用事で来られないとか言ってな。
祐司　じゃあ、俺と同い年くらいですか？
健一　君の一つ下だよ。今三年生だ。
祐司　それで、今日はどうしてここに？
健一　まあ、久しく帰ってないからってことみたいだな。それに、新しい家族の顔も見たいってな。
美由紀　それは嬉しいわ。私も俊太さんに早く会いたいって思ってたから。で、いつここに着くのかしら？
健一　もうすぐじゃないかな。名古屋からだとそんなにかからないからな。

美由紀　でも、どこで寝てもらおうかな。今空いてる部屋はないし。
健一　ここに寝てもらえばいいさ。（ソファーを指して）あれで寝れないこともないし。それに、泊まるといっても二、三日くらいだろ。
美由紀　なんか悪いわね。
健一　家を借りる時に、俊太の部屋のことも考えるべきだったんだけど、正直そこまで余裕がなかったからな。
美由紀　そうね、あなたに息子さんがいることは知ってたけど。……
祐司　まあ、一時的なものだよ。俺は来年就職して家を出るし、俊太君もそのうちそうなるよ。
健一　俺もそう思ってる。当面なんとかしのげればそれでいいさ。
玲香　子供みんなに部屋はいらないわ、まあ、自分が部屋をもらってて、そんなこと言える立場じゃないけど。
祐司　俊太君って、結婚式にも出られないほど忙しいって、何をしてるんですか？
健一　理系で、実験とか色々あるらしい。あとアルバイトも色々やってるみたいだな。
美由紀　将来有望なんじゃないの？
健一　まあ、そうだったらいいけど。単に家に帰りたくないだけじ

やないかな。

玲香　私の友達もそんな子珍しくないわ。一年に一度帰ったらいい方だって。

美由紀　私の方は幸い二人とも自宅から通ってくれてるけど、一旦下宿とかしちゃうと、どうしてもそうなるのかな。

祐司　そんなもんだよ。俺も下宿してたら、たぶんそうなると思う。

美由紀　じゃあ、就職したらもう家には帰ってくれないの？

祐司　そもそもどこに勤務になるか分からないよ。九州とか北海道とかに勤務になったら、帰りたくてもめったに帰れないよ。

健一　そういえば祐司君は、もう内定はもらったんだったな。

祐司　ええ、まあ。一社だけですけど。

健一　でも、とりあえず安心だな。そこが第一志望かい？

祐司　第一志望っていうのでもないけど、入りたかったところではあります。

美由紀　あまり贅沢を言ってもね。なかなか内定もらえない人だっているわけだし。

玲香　銀行だっけ。

祐司　まあね。だから、もしそこに行くことになったら、どこに勤務するか分からない。全国に支店があるから。

健一　銀行は転勤転勤って聞くな、とくに若いうちは。
玲香　私は就職できるかなあ。
健一　大丈夫じゃない？　しっかりしてそうだから。
玲香　いえ、そんなことないですよ。
祐司　全然ないな。高校の頃、修学旅行の集合に遅れそうになったじゃないか。
玲香　あれは、時間を間違えてただけよ。
祐司　それがしっかりしてないってことじゃないか。
美由紀　まあ、身内の恥を晒すようなことは言わないの。
祐司　でも、この人っていうか、お父さんも、もう身内だよ。
玲香　身内じゃなくて、家族よ。
健一　そう言ってくれると嬉しいよ。……そういえば、俊太を入れると、三人はちょうど一つ違いなんだな。
美由紀　あ、そうよね。玲香が今二十歳（はたち）で、二十一、二十二ということね。
健一　ちょうど三きょうだいっていう感じだな。
玲香　お父さんのところは、子供は一人なんですね。
健一　ああ、もともと妻は病気がちで子供ができにくい体質だったしな。流産もしてるし。それで四十を出た頃に乳癌になったんだ。

美由紀　流産と乳癌は関係ないと思うけど。
健一　まあ、それは関係ないだろうけど。でも、健康で過ごしてたっていう時期は多くなかったな。
玲香　前の奥さんが亡くなられて、ずいぶん経つんですか？
健一　（笑って）そんなかしこまった言い方しなくてもいいよ。もう家族なんだから。そう君が言ってただろう？
玲香　ああ、そうね。……それで、今聞いたことは、……
健一　ああ、俊太が中学二年だったから、七年前かな。
美由紀　そうだったの。それは私もよく知らなかった。その間大変だったでしょう。男手ひとつで俊太さんを育てるのは。
健一　それは美由紀の方がそうだよ。女手ひとつで二人の子供を育てるなんて、俺よりもずっと大変だったはずだ。
美由紀　大変じゃなかったっていうことはないけど。でも、その時はもう二人とも結構大きかったしね。
健一　三年前、だったのかな。
美由紀　そうね、その年の暮れよ。前の夫と別れたのは。
健一　じゃあ、二人は、……
祐司　俺が大学に入った年で、玲香が高二だったな。
健一　それは、一番金がかかる時だな。

美由紀　慰謝料は全部学費に消えたかな。
健一　馬鹿な人だな。こんないい人と別れるなんて。……（思い直したように）あ、いいのかな、子供の前でこんな話をして。
玲香　別に、気にしないで。私たちもさんざんそういうこと言ったから。
健一　そういうことって？
玲香　前のお父さんが、駄目な人だったって。
祐司　暴力を振るうこともあったしな。俺たちにも、母さんにも。
美由紀　そうね。そういう人だった。

やや間ができる。

健一　まあ、お互い色々あったってことだな。事情はそれぞれだけど。……それにしても、俊太はいつ頃着くんだろうな。ラインが来てるかもしれないから、ちょっと失礼、スマホを見てくる。

そう言って健一は席を立って足早に上手に退場する。

祐司　（美由紀に）父さん、……前のだけど、とは会ってるの？

美由紀　この半年くらいは会ってない。玲香が二十歳になって、養育費も終わったしね。

玲香　今まで貰ってたの？

美由紀　だって、そういう取り決めだったもの。まあ、きちんと払ってくれてはいたわ。

祐司　母さんも仕事をしててよかったね。

美由紀　こういう事態に備えてたってわけでもないけどね。でも、二人で働かないと子供なんか育てられないわ。あなたたちも肝に銘じてた方がいいわよ。

祐司　俺は結婚するつもりないよ。

玲香　えー、そうなの？

美由紀　そんな淋しいこと言わないでよ。

そこに健一がスマホを持って戻ってくる。

健一　やっぱり連絡が来てた。一時間くらい遅れるそうだ。（そう言いながら席に着く）

美由紀　まあ、時間通りには行かないものよ。

玲香　一時間だったらましな方。

祐司　お前なんか、今帰るって言って、家に着くの二時間後とかしょっちゅうだしな。

玲香　しょっちゅうじゃないわ。そういうの、相手を安心させるために、すぐって言うのよ。

健一　学生のうちはそれでいいかもだけど、社会に出るとそうはいかなくなるよ。

玲香　そんなものなの？

健一　そういうものだよ。……それで、今そんな淋しいことって言ってたの、何が淋しいんだ？

美由紀　祐司が、結婚はするつもりないって。

健一　（祐司に）へえ、どうしてだい？

祐司　結婚したら、色々責任を負うことになるし、大変だなっていう気がする。自分一人ならなんとか生きていけそうだけど。

美由紀　だから、それが淋しいって言ってるのよ。

健一　そんな風に考える若い人が増えてきたのかな。

美由紀　みんなそうだったら、子供がいなくなるわ。

健一　そうなりつつあるよ、どの国でも。韓国なんか、出生率が１を切ってるんだろう？玲香　ああ、聞いたことある。

健一　色々暮らしにくい時代になっていくのかな。俺たちの時代は

まだましだったっていうことになるのかな。

祐司　未来から見たらね。

健一　でも、家族の形も変わっていくんじゃないか。俺たちがその例だよ。

祐司　くっついたり、離れたりってこと？

健一　まあ、そういうことかな。

美由紀　私たちはくっついたところなんだから、未来志向ってことよ。

祐司　どうなるか分からないけどね。

健一　あまりネガティブなこと考えてても、仕方ないんじゃないか。

玲香　そうそう、ポジティブに行きましょう。

美由紀　あ、そう言えば、ポジティブなことを忘れてたわ。

玲香　ポジティブなこと？

美由紀　食後のデザートにいい物を買ってあるのよ。今夜はお父さんも一緒だし。

玲香　え、何？　楽しみなんだけど。

美由紀　メロンを買ってあるの。

玲香　へえ、メロンなんて珍しい。

健一　俺も久しく食べてないな。

美由紀　今から切ってくるわ。

そう言って美由紀は席を立ち、奥の台所に向かう。

玲香　私も手伝うわ。

祐司　俺は皿を出すよ。

玲香と祐司も席を立ち、奥の台所に移動する。テーブルの健一はカレーを食べ終え、スマホの画面を確認する。

――溶暗

2

同じ日の夜、1時間ほど経った頃。前場と同じ居間兼食堂の空間。上手よりのソファーに健一と美由紀が座っている。ダイニングテーブルの下手側の席には青いパーカーを着た若い男（俊太）が着いており、カレーを食べ終わろうとしている。傍らに旅行用のバッグを置いている。

美由紀　（俊太に）どう、口にあったかしら？

俊太　合うっていうか、おいしかったです。ごちそうさまでした。

俊太は皿とコップを持って立ち上がろうとする。

美由紀　あ、いいわよ。座っていて。

美由紀は立ち上がって俊太から食器を受け取り、奥の台所に行く。

俊太　すみません。

美由紀　気にしないで。久しぶりにお父さんと会ったんでしょう？　ゆっくりしていて。

俊太　有難うございます。

美由紀　そんなかしこまらないでいいわよ。

健一　まあ、初対面だから仕方ないさ。

美由紀　（台所から）さっき玲香もそうだったわね。まあ、玲香は初対面じゃないけど。

美由紀はそのまましばらく台所の片付けをする。

俊太　（健一に）この家は買ったの、それとも借りてるの？
健一　借家だよ。
俊太　高いんじゃない？　結構ちゃんとした家だし。
健一　まあそれなりだな。お前が心配しなくていいよ。
俊太　別に心配はしてないけど。それより、今日寝るところがあるかの方が心配だけど。
健一　ああ、ちょっと悪いんだけど、このソファーで寝てもらえるか？
俊太　それ、ソファーベッド？
健一　いや、普通のソファーだよ。
俊太　そうだろう。寝るにはちょっと小さいかな。……さっき二階に上がったら、納戸みたいなのがあったけど。
健一　荷物で一杯だぞ。
俊太　でもそれって大体俺のだろ？
健一　ああ、それはそうだな。
俊太　どうせ片付けないといけないんだから。俺が自分で片付けて寝るスペースを作るよ。健一　それでいいなら、そうしたらいいんじゃないか。

美由紀が奥の台所からメロンの一片を皿に載せて出てくる。

美由紀　俊太さんの寝る場所？

健一　ああ、二階の納戸で寝るって。荷物を片付けて。

美由紀　そう、それでいいの？

俊太　ええ、どうせ二、三日ですから。それに納戸にあるのは大体俺の荷物だから。

美由紀　何か悪いわね。あ、これ食べてちょうだい。私たちはさっきいただいたから。

俊太　有難うございます。メロンなんて久しぶりだな。

健一　俺もさっきそう言ったよ。

俊太はメロンを食べ始める。美由紀はまたソファーの健一の隣に座る。

健一　それで、今日帰って来たのは？

俊太　まあ、一度帰ろうって思ってたからね。新しい家族の顔も見ておきたかったから。

健一　お前、結婚式にも来なかったからな。

俊太　ああ、あの日は用事が立て込んでてね。それに俺、そんな式に出る服も持ってないし。

美由紀　服なんか気にしなくてもよかったのに。

健一　レンタルでもできただろ。

俊太　わざわざレンタルするのもね。（健一と美由紀を眺めて）……でも、よく結婚したね。おたがい再婚同士で。

健一　そりゃあ、縁は異なものって言うだろう？

俊太　いや、知らないけど。

健一　人と人の結びつきは、意外で面白いものだっていうことだよ。

俊太　へえ、そういう意味か、初めて聞いたよ。

健一　日本人なら知っておけよ。

俊太　俺、理系だしね。あんまり古い言い回しには通じてないよ。

健一　別に死語でもないぞ。

美由紀　今の若い人は聞かないかもね。

俊太　それで、どんな風に意外で面白かったの？

健一　あらたまって聞かれると、別に言うほどでもないけどな。

美由紀　私たち、陶芸教室で知り合ったのよ。

俊太　陶芸？　父さん、陶芸なんかやってたっけ。

健一　去年から始めたんだよ。

俊太　じゃあ、俺が大学に入ってからってことか。
健一　そうだよ。だからお前は知らないんだ。
俊太　またどういう風の吹き回しで？
健一　趣味を始めるのに理由なんかいらないだろ。まあ、焼き物を集めるのは昔から好きだったさ。
俊太　ああ、そういえばうちに萩焼とかあったね。……あ、これがそうか。

俊太は、メロンを置いていた皿を見る。

美由紀　そうよ。私が始めたのは二年前だから、ちょっと先輩ね。
俊太　それで、意気投合したってことか。
健一　まあ、そういうことだな。
美由紀　あなたにも、意気投合する人がいるんでしょ？
俊太　え、それって彼女ってこと？
美由紀　そういうこと。
健一　俺も聞いたことないな。
俊太　いないよ。
美由紀　本当、いるんじゃないの？　結構イケメンだし。

健一　それは俺に似たんだな。
美由紀　まあ、あつかましい。
俊太　とくに付き合ってるっていう子はないな。理系の学部だから女の子少ないし。
健一　サークルとか入ってるんじゃないのか？
俊太　フットサルのサークルだよ。男女別でやってるから、あまりそこでも会わないな。美由紀　大丈夫。そのうち見つかるから。

そこに祐司が上手からカッターシャツを持って登場する。

祐司　あ、母さん。悪いけど、このシャツのボタンが取れてしまったんだけど、明日までに付け直してくれるかな？
美由紀　いいけど、何かあらたまったところに行くの？
祐司　大学の先輩と面談があるんだよ。
美由紀　内定もらったところ？
祐司　ああ、そう。……（俊太に向かって）俺、祐司って言うんだ。よろしく。
俊太　（椅子から立って）俺は俊太って、言います。よろしく。
健一　これからは兄弟っていうことになるから、お互い仲良くな。

俊太　（椅子に座り直して、祐司に）俺と同い年くらいだけど、……
祐司　俺が一個上だよ。さっきお父さんから聞いた。
俊太　ああ、そう。四年ってことか。だから内定とか言ってたんだな。
祐司　まあ、そうだね。
俊太　内定が取れて良かったじゃない。どういうところ？
祐司　都銀だよ。
俊太　都銀だったら、御の字じゃないの？　勝ち組だよ。
祐司　いや、そんなことないよ。入ったら入ったで、結構大変だよ。転勤多いし。
俊太　ああ、そうなの？　銀行のことはよく知らないけど。
祐司　君も三年だと、インターンシップとか行ってるわけか。
俊太　ああ、いくつかね。
祐司　俺も去年結構行ったな。最近はインターンシップで内定まで行くこともあるらしいけど、君は理系だから引く手あまたじゃないの？
俊太　いや、分からないよ。苦戦しそうな気がする。
祐司　まあ、大丈夫だよ。高望みしなけりゃ。大学は国立なんだろう？

俊太　まあね。大したことないけど。
祐司　俺なんか私立の経済だよ。それでも内定もらえたから、君なら問題ないよ。

そこに上手から玲香が登場してくる。テーブルの下手側に座っている俊太はすぐに気がつき、やや会釈をする。それを見て、祐司が振り返る。

祐司　あ、玲香か。

玲香は上手側に立ち止まったまま。俊太に惹き付けられるように、しばらく見ている。

俊太　（椅子から立って）初めまして。俺、俊太って言います。
玲香　（ぎこちない感じで）初めまして、玲香です。
祐司　（玲香の表情が硬いのに気づいて）どうしたんだ、突っ立って？
玲香　あ、いや、……初対面でちょっと緊張しただけ。
俊太　（椅子に座り直しながら）緊張するような立派な奴じゃない

から。

玲香　そう、ですか。……

健一　（ソファーから立ち上がりながら）ここに座ったらどうだい？　俺はもう部屋に戻るから。

玲香　そうですか。すみません。

健一　じゃあ、おやすみ。

祐司・玲香：おやすみなさい。

健一は上手に退場する。

美由紀　（やはりソファーから立ち上がり）私も失礼するわ。（祐司のシャツを持って）これをすぐにしなくちゃ。

祐司　ああ、お願いするわ。

美由紀　じゃあ、みんなおやすみ。

祐司・玲香　おやすみ。

俊太　（小さく）おやすみなさい。

美由紀も上手に退場する。玲香は健一と美由紀が座っていたソファーに腰を下ろす。

祐司　（玲香に）どうして下りて来たんだ？
玲香　（硬い面持ちで、以下も同じ）いや、一度挨拶しておこうかなと思って、……みんな下にいるみたいだったし。
俊太　あ、わざわざそれで下りて来てくれたんだ。
玲香　ええ、まあ。……あと、ちょっとお兄ちゃんに話したいことがあって。
祐司　何だ？　好きな人ができたとか？　俺、そういうことの面倒は無理だから。
玲香　違うよ、そんなことじゃない。
祐司　じゃあ、何だ、あらたまって。
玲香　（ことさらに軽い感じで）まあ、ちょっとね、大したことじゃないわ。
俊太　（空気を察したように）あ、俺はいない方がいいみたいだな。まあ、きょうだいで積もる話をしてくれよ。
祐司　積もる話って、毎日顔見てるって。
玲香　（俊太に）悪いけど、そうしてもらえるかな？
祐司　おいおい、俊太をのけ者にするのか？
俊太　いいよ。俺も納戸の片付けをしないといけないから。今日寝

れなくなるからな。

祐司　ああ、ほんと悪いね。片付け手伝おうか？

俊太　いいよ。俺の物がほとんどだから。

祐司　そうみたいだね。もし俺たちの物があったらのけといて。

俊太　分かった。それじゃあ、おやすみということで。

祐司　ああ、おやすみ。

玲香　おやすみなさい。

俊太は上手に退場していく。

祐司　（俊太が退場したのを見計らって）何だ、話って？

玲香　大したことじゃないって言ったけど、大したことかもしれない。

祐司　えらくもったいぶるな。

玲香　（言いよどみながら）……あの人を見て、思い出したことがあるの。

祐司　思い出したこと？

玲香　ええ、……三年前のこと。

祐司　三年前？　……ああ、あのことか。

玲香　そう、あのこと。
祐司　どうしてそれを今、……
玲香　（声を抑えながら）あの時、私にあんなことをした人、あの人に似てるのよ。
祐司　（驚いて、声を低め）おいおい、そういうこと、軽々しく言うなよ。

以下の会話も両者とも声を抑えつつ行われる。

玲香　分かってる。でも、そうとしか思えない。
祐司　何か根拠はあるのか？　ただ似てるってだけじゃ、そんな人間いくらでもいるだろ。それに、その時ちゃんと顔を見たのか？
玲香　ちゃんとじゃないけど、見たわ。眼鏡掛けて、マスクしてたけど。
祐司　それで似てるって分かるのか？
玲香　眼の感じが似てた。顔の輪郭もそっくりだった。
祐司　それだけではな。……
玲香　……あの人、青のパーカー着てたよね。
祐司　ああ、そうだな。

玲香　私を襲った人もそうだった。
祐司　それははっきりしてるのか？
玲香　はっきり覚えてる。
祐司　それにしても、青のパーカーなんて、珍しくないしな。
玲香　そうね。……だから、私がそう言ったところで、たぶん証拠にはならない。
祐司　証拠にならないって、……お前、俊太を訴えるつもりなのか？
玲香　訴えるって、わけじゃ、……
祐司　じゃあ、どういうわけだよ？
玲香　……はっきりさせたいっていう気はある。
祐司　それは、あいつを追い詰めるっていうことか？
玲香　もしあの人が、そうだったら。

祐司はすぐに言葉を返せず、間ができる。

祐司　それで、母さんはどうなんだ？　母さんは、あの時のこと、知ってるのか？
玲香　私からは、話してない。
祐司　話してない？　どうしてだ。俺にだけ話したのか？

玲香　それは、あの晩、帰って来た時、たまたまお兄ちゃんがいたから。ママは、あの日仕事で遅くなって、いなかった。

祐司　それからも、話してないのか？

玲香　そうね。話しそびれてしまって。……でも、もしかしたら知ってるかもしれない。

祐司　どうしてそう思うんだ？

玲香　そういう風に感じることがあった。何か、あのことを気づいているような。……それより、お兄ちゃんがママに話したっていうことはないの？

祐司　話してないよ。……でも、全然ないかっていうと、……

玲香　あるってこと？

祐司　あの頃、お前、ふさぎ込んでたじゃないか。まあ、その事のせいかどうかはわからないけど。だから、母さんが心配してたことは事実だよ。それで、俺にお前のことをそれとなく聞いてきたことは、あったな。

玲香　それで、話しちゃったの？

祐司　いや、そのままは話してないよ、絶対。

玲香　そのままじゃないように、話したってこと？

祐司　細かいことは覚えてないよ。それより、今母さんに確認すれ

ばいいじゃないか。

玲香　今？

祐司　そうだよ。今後のことがあるし。俊太はもう他人じゃないんだぞ。

玲香　そうね。俊太さんに直接聞くわけにはいかないし。

祐司　それは、そうだな、すぐにはな。俺、どうせ明日のシャツを受け取らないといけないから、母さんのところに行ってくる。

玲香　明日のシャツって？

祐司　シャツのボタンが取れたから、母さんに付けてもらってるんだよ。あとは母さんと話せよ。

そう言いながら祐司は上手に退場していく。玲香は何か言いたげだが、大きな声を出したくないのか、それを抑える。それからソファーに座ったまま、考え込んだかと思うと、立ち上がって、そのままいらいらと部屋を歩き回り、ダイニングテーブルの下手側の席に座る。

しばらくして、美由紀が上手から怪訝そうな顔をして登場する。

玲香　（美由紀に気づいて）あ、ママ。

美由紀　どうしたの？　今祐ちゃんに聞いたんだけど。何か、大事な話があるみたいだけど。

美由紀は上手ソファーに腰掛ける。

玲香　ええ、……まあ、そうなの。

美由紀　（心配そうに）どういうこと？　今話さないといけないこと？

玲香　今話さないといけないかどうかは分からないんだけど。

美由紀　何、もったいぶってないで話してよ。

玲香　……今から三年前のことなんだけど。

美由紀　三年前というと、あなたが高校二年の時ね。

玲香　ええ、そうよ。……その年の今頃だったかな。私、襲われたのよ、夜、外を歩いていて。

美由紀　襲われたって、……レイプっていうこと？

玲香　いや、レイプまでされたってわけじゃないけど。

美由紀　でも、襲われた。

玲香は黙ってうなずく。

美由紀　どこで？
玲香　二丁目の公園。
美由紀　どうしてその時ママに言わなかったの？
玲香　言えなかったの。怖くて。
美由紀　怖い、何が？
玲香　（顔を伏せて）だって、外にいたのは私だったし、夜外にいたってことは、私がふらふらしてたってことになるじゃない。
美由紀　でもあの日は、夜塾じゃなかったの？
玲香　それはそうだけど。
美由紀　じゃあ、まっすぐ帰らなかったっていうこと？
玲香　どうだろう。……よく覚えてない。
美由紀　それで、どうしてそのことを今ママに言うの？
玲香　あの人、……俊太さんが、その時の人に、似てるのよ。
美由紀　似てるって、……それだけじゃ何とも言えないじゃない。誰かに似てる人なんか、世の中にいくらでもいるわ。
玲香　さっきお兄ちゃんにもそう言われた。……でも、あの人、俊太さんと同じ青いパーカーを着てた。
美由紀　青いパーカーは別に珍しくないわ。

玲香　それもさっき言われた。
美由紀　それで、私に何をしてほしいの？
玲香　何かしてほしいってことじゃないけど、あったことを知ってほしかったっていうか。……

やや間ができる。

美由紀　それで、ママが今までそのこと知らなかって思うの？
玲香　え？
美由紀　知ってたわよ。
玲香　（あまり驚かない）そう。……お兄ちゃんから聞いたのか。
美由紀　祐ちゃんははっきり話してない。でも口ぶりから、何となく感じたわ。
玲香　じゃあ、どうして私に言わなかったの？
美由紀　そうね。祐ちゃんの話だけではっきり分からなかったし、私の方からも聞きづらかったの。あなた、レイプされたの、なんて。……あなたから言い出すのを待ってたっていうのもある。
玲香　ずいぶん薄情なのね。
美由紀　それは悪かったわ。でも、あの頃、私もあの人と離婚する

間際で、色々大変だったのよ。
玲香　それは分かってる。
美由紀　ずっと心配してたのよ。……でも、あなたあれから大丈夫そうに過ごしてたし、それで、聞きそびれてしまった。
玲香　やっぱり薄情じゃない。本当に心配してたら、聞くはずだわ。
美由紀　そうね。……自分のことの方にかまけていたというのが、正直なところかもしれない。それに、あなたの受験とかもあって、そっちにも気を取られてたし。……でも、大学にもちゃんと受かってくれたのは嬉しかった。
玲香　結局自分の都合だけなのね。
美由紀　そう言われたら、そうかもしれないわね。でも、あなたが大学に通えてるのは誰のおかげ？
玲香　それは分かってる。……恩着せがましいこと言わないで。
美由紀　恩を着せるつもりじゃないわ。
玲香　でも、そんな風に聞こえる。

玲香は立ち上がって、上手に退場していこうとする。

玲香　（上手で）私、この家出て行くことにするわ。前から下宿す

ること考えてたの。

美由紀　そう。それはあなたの選択だから。でも、ママは仕送りできないわよ。そこまで余裕はないから。

玲香　分かった。バイトでも何でもするわ。

そう言って玲香は上手に去って行く。美由紀はソファーに座ったまま硬い表情。

――溶暗

3

翌朝。同じ場所。ダイニングテーブルに祐司と玲香が向かい合って座っている。それぞれの前にはコーヒーカップが置いてある。玲香は平服だが、祐司は昨日のシャツにスーツを着て、ネクタイを締めている。

祐司　……そうか、母さんもちょっと冷たいな。

玲香　まあ、あの時私がはっきり言わなかったのが良くなかったしね。

祐司　いや、言わなかったのは仕方ないよ。それで、家を出るって本気なのか？

玲香　そのつもり。

祐司　気持ちは分からなくはないけど、簡単じゃないだろう？

玲香　そうね、私そんなお金ないし。

祐司　悪いけど、俺は援助できないよ。

玲香　お兄ちゃんに助けてもらうつもりないよ。

祐司　あまり衝動的に行動しない方がいいぞ。俊太はすぐ名古屋に戻るんだろうし、一緒にいたくないという気持ちは分かるけどな。無駄な金や労力は使わない方がいい。

祐司は席を立って、スマホの自撮り画面で自分の顔や服装をチェックする。

玲香　お兄ちゃんは合理主義だから。

祐司　そうだよ。俺は合理主義で生きてる。家から通えるのに下宿しようと思ったこともないしな。

玲香　私は、ママとも距離を取りたいのよ。

祐司　お前、母さんとあんまり仲良くないしな、もともと。

玲香　そうね、どうしてだろ。
祐司　女同士の張り合い、みたいなのとか。
玲香　え、ママと張り合おうなんて思ったことないよ。
祐司　そうか？　家を出たいって言ったのも、張り合ってるってことじゃないのか？
玲香　そんなことないよ。
祐司　そういえば、お前が彼氏作った時も、母さんあんまりいい顔しなかったんじゃないのか？
玲香　そうだったかしらね。確かに、あまりいい風には言わなかったわね。
祐司　ほら、そういうことだろ。自分は離婚して一人になったのに、お前は彼氏がいるって、面白くないんじゃないか。
玲香　そんな風に思うとしたら、そっちがおかしいよ。自分の娘なのに。
祐司　そういう母親もいるってことだよ。母さんは結構我が強いからな。それで、彼氏とはつづいてるのか？
玲香　まあね。今日も夜会う予定。もう家には呼ばないわ。
祐司　そりゃあ、お前、家を出るんだろ？
玲香　（気が付いたように）ああ、そうだった。

祐司　なんだ、いい加減だな。ほんとは別に下宿なんかしたくないんだろ。母さんに張り合ってそう言っただけで。

玲香　そんなことない。一人暮らししたいと思ってる。

祐司　彼氏も呼び放題だしな。

玲香　そんな風に言わないで。お兄ちゃんの方こそどうなのよ。彼女はいないの？

祐司　デートする子はいるさ。でも、そこまでだな。今は就職の方が忙しい。こんな風にな。

そう言って祐司は自分の出で立ちを見せる仕草をする。

玲香　ああ、大学の先輩と会うんだっけ。

祐司　そうだよ。まあ、就職の面接じゃないから、緊張はしてないけどな。

玲香　内定もらって、安心だね。

祐司　だって、もう十月の下旬だぜ。今もらってなかったらどうするんだよ。お前も来年の今頃はどっかに決まってるさ。

玲香　そうだったらいいんだけど。

上手から健一と美由紀が登場する。二人とも作業をするようなラフな普段着である。

健一　あ、お早う。
祐司　お早うございます。二人揃って、お出かけ？
美由紀　今日は陶芸教室があるの。
祐司　朝ご飯は？
健一　俺たちはもうとっくに食べたよ。若い人みたいに長く寝てられないよ。
祐司　あ、そうなんだ。俊太君は、……
健一　まだ寝てるだろ。あいつ、休みの日はなかなか起きてこないからな。
祐司　そうなんだ。（美由紀に）陶芸教室では、今何か作ってるの？
美由紀　私は花瓶ね。この部屋が一段と素敵になるわ。
健一　俺は徳利とお猪口だな。自分で一杯やるためのな。あ、もちろん猪口はいくつか作るから、君ともそれで一杯やろう。
祐司　楽しみにしてます。
健一　祐司君は酒は強いのかい？
祐司　あまり飲まないかな。昔の大学生って、すぐ仲間で飲みに行

ってたみたいだけど。健一　そうだな。俺たちの頃はすぐ飲み会って流れになったからな。ところで、その格好は、君もお出かけだな。

祐司　ええ、大学の先輩に会いに。

健一　ああ、昨日言ってたやつだな。先輩後輩の繋がりって、就職してからも大事だから、気に入ってもらうといいよ。

祐司　ゼミの先輩なんで、昔から色々教えてもらってます。よく怒られたけど。

健一　怒られた？　今時後輩を怒るなんて、気概のある人だな。

祐司　筋を通す人なんで、プレゼンの作り方とかも甘いとかよく指摘されました。

健一　それは頼りがいがあるな。会社に入ってからもしっかり指導してもらえるんじゃないか？

祐司　まあ、配属先次第ですけど。（時計を見て）それじゃあ、その前にもちょっと用事があるので、そろそろ出ます。（下手に退場しかける）

美由紀　夜は遅くなるの？

祐司　いや、そんなに遅くはならない。八時までには帰るよ。

祐司は下手に退場していく。玲香は先ほどから無言でスマホをいじっている。

健一　俺たちもそろそろ出るか。
美由紀　そうね。教室で時間を潰すこともできるし。
健一　玲香ちゃんは、今日は家にいるのかい？
玲香　（スマホから顔を上げて）午前中はいます。午後はサークルの練習があるので、出ます。
健一　ああ、サークルっていうと、……
玲香　演劇です。
健一　ああ、お芝居をやってるんだ。
玲香　ええ、高校時代から。
健一　女優を目指してるとか？
玲香　いえ、そんなこと。好きでやってるだけです。
美由紀　演技の勉強は将来役に立つかもね。
玲香　どうして？
美由紀　だって、色々な場面で演技しないといけなくなるんじゃない？
玲香　演技しないといけない場面って？

美由紀　人間、社会に出たら、色んな仮面を着けて振舞わないといけなくなるものよ。いい人の仮面や、悪い人の仮面や、色々ね。

玲香　何言っているのか分からない。

美由紀　あなた、家でも色々な役の演技をしてるじゃない。母親に依存する子になったり、自立心旺盛な娘になったり。

玲香　ああ、昨日の話？

健一　何だ、昨日の話って。

美由紀　この子、家を出て下宿したいらしいのよ。

健一　でも、ここから大学には通えるんだろう？

玲香　通えることは通えるけど。

健一　俺と一緒に暮らすのがうっとうしいのかな？

玲香　そんなことないです。

美由紀　一人暮らしに憧れてるみたいなのよ。

健一　それは分かるが、でもお金の問題とかもあるしな。

玲香　バイトとかするつもりです。

健一　それでまかなえるかな。この辺りのアパートは結構高いし。

美由紀　ワンルームでも四万はするわよ。

玲香　それくらいなら、何とかなると思う。ルームシェアでもいいし。

美由紀　それじゃ、一人暮らしにならないじゃない。
玲香　他人と一緒に暮らすんだから、一人暮らしのようなものよ。
美由紀　都合の良い言い方ね。
健一　そういう考え方もあるよ。まあ、同居人を相性が合えばだけど。
美由紀　そんな子いるの？
玲香　いないことない。
健一　まあ、拙速で決めずに、よく考えるんだな。俺は俊太の仕送りもあるし、玲香ちゃんの分もとなると、ちょっときついな。
玲香　いえ、そんなことしてもらわなくていいです。自分で何とかします。
美由紀　そうそう、何事も自己責任でね。じゃあ、私たちは出かけるから。
健一　ああ、そうしようか。陶芸を頑張ってくるよ。
玲香　行ってらっしゃい。

健一と美由紀は下手に退場する。玲香はちょっとため息をつき、またスマホをいじり始め、しばらく画面に見入っている。上手から俊太が寝起きの様子で登場してくる。玲香に気が付くが、とくに話

しかけない。台所に入り、朝食の準備をする様子。玲香もそれに気が付き、スマホをいじるのをやめる。カップに紅茶を入れて俊太が戻ってくる。

俊太　あ、お早う。（ソファーに腰をかける）
玲香　（ぎこちなく）お早う、ございます。
俊太　敬語はいいよ。同じ年くらいなんだし。
玲香　そうみたいね。
俊太　玲香さん、だったっけ。
玲香　玲香でいいよ。
俊太　ああ、そうだな。父さんたち、もうどっか出たみたいだな。
玲香　陶芸教室に行くって。ママと一緒に今出たところ。
俊太　そうか。君は家でのんびりってわけか。
玲香　私もサークルがあるから、もうすぐ出る。
俊太　へえ、何やってるの？
玲香　演劇。
俊太　そうか、俺も大学の友達に演劇やってる奴がいるな。よく見に来いって言われるから、たまに行くけど、何やってんだかっていう代物だな。

玲香　創作劇？
俊太　そうみたいだね。俺は演劇に詳しくないから、よく分からないけど。でも、あんな訳分からないものが名作劇のわけないな。
玲香　大学生の劇って、そういうの多いから。
俊太　君たちのやってるのは？
玲香　普通のやつ、リアリズムの。一応オリジナルだけど。
俊太　へえ、そういうのもやるんだ。
玲香　結構保守的なところだから。
俊太　そう。

俊太は立ち上がってまた台所に入る。何か作業をしている様子。

俊太　（声）この家に暮らして、どれくらいになるの？
玲香　まだ二週間くらい。だからまだ片付いてない。
俊太　（声）納戸は俺が昨日結構片付けたよ。
玲香　それは有難う。

俊太はトーストとチーズを皿に載せて、戻ってくる。ソファーの前のテーブルにそれを置いて食べ始める。

俊太　まあ、大体俺の持ち物だったからね。でも君たちの物もあったよ。

玲香　そう。置いておいてくれたら、後で引き取るわ。……ところで、俊太さんたちは、これまでどこに住んでたの？

俊太　ああ、緑町だよ。君たちは？

玲香　北野町。

俊太　ああ、同じ市内なんだ。

玲香　そうみたいね。だから、親同士が知り合ったんでしょ？　陶芸教室とかで。

俊太　そういうことだね。でも、いい年した者同士がよく結婚したな。

玲香　それは、当人同士の自由じゃないの？　別に悪いことじゃないし。お互いにメリットがあるって思ったんでしょ？

俊太　結婚ってメリットでするものなのかな？

玲香　そうじゃないの？……それで、俊太さんは、どうして昨日帰って来たの？

俊太　帰って来たら悪いかい？　だって、俺の家でもあるんだろう？

玲香　それはそうだけど。何か急な感じだったから、特別な用でもあるのかなって思って。……でも、今も結構のんびりしてるし。

俊太　そうだよ。のんびりするために帰ってきたんだ。昨日言ったけど、まだ新しい家族にも会ってなかったし。新しい家も見てなかったし。

玲香　そうなの。……それで、どうだった？

俊太　どうだったって？

玲香　がっかりした？　私とかママとかに会って。

俊太　なんでがっかりするんだよ？

玲香　変な人たちだなとか、思わなかった？

俊太　普通の人じゃないか。まあ、ずっと一緒に暮らしてれば、色々あらも見えてくるのかもしれないけど。ちょっと話しただけじゃ分からないよ。

玲香　そう、それは良かった。

俊太　少なくとも俺よりは普通でまともな人たちに見えるよ。

玲香　あなたは普通の人じゃないの？

俊太　どういう意味？

玲香　そのままの意味だけど。……人に対して変なことをしたりしないかってこと。

俊太　俺がそういうことをする奴に見えるって？
玲香　見えるってことはないけど。
俊太　じゃあ、どういうこと？

　玲香はテーブルの椅子から立ち上がる。これ以降の玲香の台詞は舞台下手を移動しながら言われる。

玲香　私たち、もともと他人じゃない。でも、親同士が再婚して家族っていうことになった。でも、お互いどんな人間か知らないし、どういう過去を持ってるかも知らないし。……不安になるのは自然だと思うけど。
俊太　ああ、そういうことか。まあ、それは分かるよ。俺も君がどんな人間か知らないし。
玲香　そうね。どんな人間だと思う？
俊太　どんな人間って、……どこにでもいるって言ったら失礼だけど、演劇の好きな、普通の女子大生って感じだけど。

　やや間ができる。玲香は下手の椅子に座る。

玲香　私は、以前知らない人に襲われたことがあるの。
俊太　襲われた？　っていうのは、レイプとか、そういうこと？
玲香　ええ、そうね。……まあ、レイプされたとまでは言わないけど、襲われたのは事実。
俊太　それは、いつ頃のこと？
玲香　三年前よ。
俊太　そうか、俺が高校三年の時だな。
玲香　私は高校二年だった。
俊太　そういう経験があると、トラウマになるよな。
玲香　ええ、十分なってるわ。
俊太　カウンセラーとかに、相談したの？
玲香　その時は、何度かね。
俊太　それで、それが俺と何か？
玲香　あなた、私を襲った人に似てるの。
俊太　（驚き、また納得したように）ああ、それで、俺を疑ってるのか。
玲香　疑ってるって段階じゃないけど。……あなた、青いパーカー着てるよね。あの時の人も、青いパーカーを着てた。
俊太　じゃあ、青いパーカーを着てる男は皆強姦魔ってことか？

玲香　そんなこと言ってない。
俊太　それが俺を疑う根拠になるの？
玲香　いや、全体の感じよ、それを含めた。
俊太　そんな曖昧な根拠で疑われたら、たまらないな。
玲香　（椅子から立ち上がって、舞台前方に出て、強く）だから、疑ってるって段階じゃないって。
俊太　じゃあ、どういう段階？
玲香　まあ、ちょっと居心地は良くないかなって。一緒にいると。
……
俊太　幸い俺はすぐにいなくなるよ。
玲香　そうね。でも、家族の一員なのよね。
俊太　（やや開き直った感じで）それで、俺はどうすれば君に疑われなくなるんだ？
玲香　その人と、あなたが、別人だってことがはっきりすれば。
俊太　そうだな。それで、それはどうやって証明できるんだ？
玲香　……分からないわ。
俊太　関係あることは証明できても、ないことは証明できないよな。
　それも、ここにいない人間との関係なんか。
玲香　そうね。あなたに、私を襲ったたかって聞いたって、意味な

いしね。

俊太　当たり前だよ。はい、君を襲いましたって、答える人間なんかこの世にいないさ。

玲香　（やや間の後）じゃあ、あなたじゃないのね。

俊太　だから、それに答えても意味ないだろ。今君がそう言ったじゃないか。

玲香　分かった。……いずれにしても、私はこの家を出るつもりだから。

俊太　俺から離れるためにか？

玲香　前から考えてたのよ。……せっかくあなたのお父さんがこの家を借りてくれたようだけど。

俊太　好きにしたらいいよ。君がこの家にいようが、どっかで一人暮らしようが、俺には関係ない。

玲香　そうね。あなたには関係ない。

俊太　それじゃ、俺はもう戻るから。納戸の部屋に。

玲香　……（軽くうなずき、無言のまま）。

俊太は上手から退場し、玲香は下手の椅子に座ったまま、考え込む様子。

4

――溶暗

数日後。同じ場所。夜、健一と美由紀がダイニングテーブルを挟んで座っている。健一の前には銚子と徳利、および簡単なつまみが置いてあり、それで健一は酒を飲んでいる。奥の壁にある棚（あるいはチェスト等）には花瓶が置かれ、花が生けられている。

健一　やっぱり自分で作った銚子で酒を飲むのは最高だな。一段とうまく感じるよ。君も一杯どうだ？

美由紀　遠慮しとくわ。夕ご飯の時いただいたし。……作品が届いたから飲み直すって、身体のことも気をつけてね。

健一　仕事に差し支えないようにしてるさ。

美由紀　（後ろの壁際の花瓶の方を向いて）私の花瓶も素敵でしょ？

健一　もちろんだよ。君の方が一年先輩だからな、俺より上手だよ。……ところで、玲香ちゃん、やっぱり下宿するんだってな。

美由紀　そうね。ルームシェアする友達が見つかったから、一緒に住むんだって。２ＤＫのアパートに。

健一　いいんじゃないか？　独立心旺盛で。
美由紀　それはそれでいいんだけどね。……
健一　ああ、俊太とのことか。
美由紀　そういうこと。あなた、今まで知らなかったの？
健一　いや、俺は気が付かなかった。前の家内が死んでから、仕事が忙しくなって俊太のことまでなかなか気が回らなくてな。
美由紀　それで、どうなの、本当のところは？
健一　俺に聞かれても、答えられないよ。無責任なようで申し訳ないが。俊太はすぐに名古屋に戻っちゃったし、聞いたところでそんなことはしてないって言うに決まってるしな。
美由紀　そうでしょうね。……俊太さんがここにいたの二日間だけだったけど、ごく普通の好青年に見えたしね。
健一　好青年かはともかく、ごく普通というのは、俺もそう思ってた。
美由紀　そう、そう思ってたの？……私は、ちょっと意外だったかな。
健一　意外？　意外ってどういうことだ？　前から俊太を知ってたような言い方だが。
美由紀　そうだって言ったら？

健一　ちゃんと話してくれないか？　美由紀は、以前から俊太を知ってたっていうことだな。

美由紀　ええ、そうよ。

健一　（驚く）え、どうしてだ？　どうして俊太のことを知ってたんだ？

美由紀　実を言うと、あなたを知る前から、俊太さんを知ってるの。

健一　（気づいたように）それは、玲香ちゃんとのことを通してだな。

美由紀　ええ、そうだわ。

健一　詳しく話してくれよ。

美由紀　分かったわ。いずれ話すことになると思ってたから。

美由紀は椅子から立ち上がり、舞台前方に動きながら、語り始める。

美由紀　玲香が男の人に襲われたっていうことは、直接あの子からは聞かなかったの。私には話しにくかったんでしょうね。でも祐司には話してたのよ。その日帰って来た時に、祐司に会ってしまったから。私はその日は仕事で遅くなって、いなかったのよ。……

でも、後で祐司が私にそれとなく話してくれた。祐司もあの子に口止めされてたらしいけど、小出しにして話してくれたのよ。それで、その話からだんだんその男のイメージが私の中に出来上がってきたの。

健一　それが、俊太と重なってことか。

美由紀　そうね。それで、ある日道を歩いていたら、ピンとくる人とすれ違ったの。祐司から聞いていたイメージとぴったり重なる人にね。三年前の、十一月頃かしら。……で、とりあえずその人の後をつけたのよ。ドキドキしたけど、何とか見つからなかったわ、最後までね。

健一　最後っていうのは、……。

美由紀　そう、あなたの前の家よ。緑町の。それで、表札があったから、名前を確認できた。

健一　ということは、陶芸教室で会う前から、俺の名前を知っていたってことか？

美由紀　いや、知らなかった。あなたと会ったのは、次の年の六月頃だったじゃない。

健一　ああ、そうだな。ということは、俺とあそこで会ったのは偶然だったっていうことか？

美由紀　そう、それは本当に偶然。教室で隣にいる人が、あの家の人だったとはね。あなたの名前を聞いて、南雲（なぐも）だって分かった時は、本当にびっくりした。

健一　南雲っていう名前はそれほどある名前じゃないからな。

美由紀　そう。それに、顔がやっぱりどことなく似てたから、あの人の父親だってすぐに分かった。

健一　だから息子のことを聞いたんだな。

美由紀　そうね。確認の意味でね。でも、それ以上のことは聞けなかった。

健一　聞かれても答えられないよ。

美由紀　そうだと思ってね。それに、俊太さんがその男だという可能性も、ただの直感だったし。

健一　まあ、それはそうだろうけど。……でも、陶芸教室で君が俺と親しくしてくれたのは、俊太のことを聞き出すためだったっていうことか？

美由紀　正直言って、そういう面はあるわ。でも、それはきっかけよ。話していくうちに、あなた自身がだんだん好きになっていったの。

健一　その頃前の旦那とは、……

美由紀　もう離婚してた。だから不倫したわけじゃない。
健一　そうか。それは問題なかったのか。でも、……

健一はしばらく黙り込む。

美由紀　何か思い当たることがあるの？
健一　……なくはないな。
美由紀　どういうこと？　話してほしい。

美由紀はダイニングテーブルの、健一の前に座る。

健一　玲香ちゃんが襲われたっていう出来事があったのは、三年前の今頃だったよな。
美由紀　ええ、そうね。
健一　その頃、そういえば、あいつと衝突することがあったな。
美由紀　どういう衝突？
健一　進路というか、受験のことだよ。あいつ、北海道の大学を受験したいとか言い出して、ちょっと揉めたんだよ。
美由紀　北海道？　北大とか？

健一　まあ、そうだな。それで、なんでそんな遠くの大学に行きたいんだ、って聞いたら、前から北海道に憧れていたとか言うんだ。

美由紀　でも、北海道には行かなかった。

健一　ああ、そんなことで大学を決めるのかって言って、ちょっと言い合いになった。

美由紀　それで？

健一　その時は、あいつも折れて考え直すっていうことになった。それで、東京圏の大学に行くのかと思ったら、結局名古屋の大学を受験したんだ。その時もどうしてそんな勝手なことするんだって揉めたさ。

美由紀　俊太さんが、名古屋の大学を受けるって言い出したのはいつ頃？

健一　そうだな。その年の暮れになってからかな。

美由紀　それって、玲香が襲われた後ね。

健一　ああ、そうなるな。……つまり、もし襲ったのが俊太だとして、事件から逃げるためにここを離れようとしたっていうことか？

美由紀　その可能性はあるんじゃない？

健一　そうかもしれないな、今考えてみると。

美由紀　でも大学受験と、玲香のことがどう繋がるの？

健一　俺は、どうも結構口うるさい方みたいなんだよ。自分じゃ分からんけどな。家内が死んで、子供が俊太一人っていうこともあってな。ちょっと勉強とか進学とかに口出ししすぎたところがあった。とくにその頃受験期だったからな。

美由紀　それで、俊太さんに反発されたっていうこと？

健一　そうみたいだな。あいつ、受験の重荷と俺の口出しで、ちょっと鬱になってたところがある。

美由紀　じゃあ、そのはけ口に玲香が、……

健一　そうかもしれない。もしそうだったら本当に申し訳ない。

そこに、上手から玲香が登場してくる。手に自分のではないスマホを持っている。

玲香　いえ、お父さんは関係ないわ。

健一　（玲香に気づいて）あ、そこにいたのか。

玲香　私のことを話してたみたいだけど。

健一　ああ、そうだよ。三年前に起きたことについてな。

玲香　そう。それに関してだけど、こんな物が見つかったの。

玲香は二人に近寄り、手に持ったスマホを見せる。画面がひび割れた、古いスマホである。

美由紀　何、このスマホ？　画面が割れてるじゃない。
玲香　私のじゃない。
美由紀　じゃ、誰の？
健一　それは、俊太のだ。
玲香　そう、俊太さんの。
美由紀　どこでそんな物を？
玲香　明後日引っ越しする予定なの、アパートに。それで、納戸で私の荷物を整理してたの。そしたら、これが見つかった。
美由紀　それで、どうしてそれをここに？
玲香　三年前のことに、関係してるんじゃないかと思って。
美由紀　ああ、その時に割れたってこと？
玲香　その可能性がある。あの時、相手の男ともみ合って、最後に思い切り突き飛ばして、逃げたのよ。
健一　そうかもしれんな。
美由紀　スマホの中を見たら分かるんじゃない？

玲香　充電器は私のが使えたから、充電はできたんだけど、パスワードが分からないから、開けられない。
美由紀　ああ、そういうことね。
健一　（ダイニングテーブルの椅子から立ち上がり、玲香に近寄り）ちょっと貸してくれないか。

玲香は健一にスマホを渡す。健一はそれを手に取って、操作する。

健一　開けられたよ。やっぱり俊太のだよ。
美由紀　よくパスワードが分かったわね。
健一　俊太が操作するのを時々見てた。前の家内の命日がパスワードなんだ。
美由紀　へえ、お母さん思いだったのね。
健一　俊太は俺よりも家内になついてたからな。
美由紀　それでも、だから俊太さんが玲香を襲ったっていう証拠にはならないわね。
健一　それはそうだ。（スマホを操作する）現場の写真のようなものは映ってないな。

健一はスマホを玲香に渡す。玲香は中の写真などを確かめる。

玲香　そうね、とくにその証拠になるような写真はないわ。……、でも、メールやラインの履歴が、三年前で終わってる。

玲香はスマホをダイニングテーブルの上に置いて離れ、下手の椅子に腰掛ける。

健一　そうだよ。三年前スマホを買い換えたことを覚えてる。壊れたからって言ってた。自分で買うって言ってたけど、俺が半分出してやった。

美由紀　へえ、優しいじゃない。でも半分だけ出すっていうのが、ちょっとケチね。

健一　全部自分で出させてもよかったんだけどな。まあ、受験のための参考書とかも買わないといけなかったし、それに今の子はスマホがないと連絡もできないからな。必需品だと思って助けてやった。

玲香　でも、どうしてこのスマホを処分しなかったんだろう。残しておいたら、こうやって見つかる可能性もあるのに。

美由紀　それは、俊太さんがあなたを襲ったって決めつける言い方よ。

玲香　決めつけてはいないわ。でも、その可能性が高いことは事実じゃない。

健一　確かにその通りだよ。

美由紀　でも、逆に考えれば、俊太さんがその男じゃなかったから、処分しなかったともいえるんじゃないの？

健一　まあ、論理的にはそうだな。犯人だったら証拠を隠滅するのが普通だろうから。

玲香　（椅子から立ち上がり）え、でもお父さん、今犯人の可能性があるって言ったじゃない。

健一　ああ、そうだ。……正直、これだけの物証では、なんとも言えんよ。

美由紀　私も、これだけで俊太さんがあなたを襲ったとは決めつけられないと思う。

玲香　私たちは警察じゃないわ。はっきりした証拠がないとクロじゃないっていう話じゃない。

美由紀　要するにあなたは、俊太さんに襲われたってことにしたいのね。

玲香　だって、一番怪しいじゃない。それに、この前俊太さんに会った時、やっぱりこの人だって思ったわ。

美由紀　どこでそう思ったの？

玲香　それは声とか、見た感じとか、全体からよ。

美由紀　全体からって、漠然としてるわね。

玲香　人間の印象って、そんなもんじゃないの？

健一　さっきの話だけど、犯人だったら証拠を隠滅するっていうのは、違うかもしれない。自分が言ったことだけどな。

美由紀　どうして？

健一　だって、その時点では俺たちが家族になるっていう可能性はなかったわけだし。

美由紀　ああ、それはそうね。その時は俊太さんはあなたと二人暮らしだったわけだから、犯人だったとしても隠蔽する必要はないわ。それにその頃受験期だったんでしょう？　使わなくなったスマホを処分するなんてことにまで頭が回らなかったんじゃない？

玲香　でも、この前この家に来た時、処分しようとするんじゃないの？　だって、私がそういう話を出したんだから。置いておいたらまずいって思うんじゃない？

健一　まあ、このスマホのことを忘れていたのかもしれないけどな。

玲香　そんなことない。だって、私が自分の荷物を整理してたら、普通に眼に入ったんだもの。俊太さんがその前に納戸を片付けたんなら、見付けないはずない。

やや間ができる。美由紀はテーブルの上の俊太のスマホを手に取って、中を開けて色々と調べる。

健一　だったら、ひょっとしたら、俊太は誰かに見付けてもらうために、わざと置いたままにしておいてのかもしれないな。

美由紀　どうしてそんなことを？

健一　分からない。……

美由紀　（スマホを操作しながら）あれ、隠しフォルダみたいなのがある。

健一　隠しフォルダ？

美由紀　非表示フォルダよ。

健一　そんなものがあるのか。初めて聞いたな。

玲香　（美由紀に近寄り）何が入ってるの？

美由紀　（しばらくフォルダの中身を眺めて）こんなものよ。

美由紀はスマホの画面を玲香に見せる。玲香はスマホを手に取って画面を見る。

玲香　え、どうして、……（と絶句する）
健一　何が写ってるんだ？
美由紀　玲香よ。
健一　（驚き）本当に？
玲香　ええ、私が写ってる。

玲香はスマホを健一に渡す。健一はそれをスクロールしつつ見る。

健一　本当だ。玲香ちゃんだ。……あいつ、前から玲香ちゃんを狙ってたのか。
美由紀　そうかもしれない。でも、問題なのは、その写り方よ。
健一　え、何が問題なんだ？
美由紀　玲香は公園のベンチに一人で座ってる。夜にね。
健一　あ、そういうことか。
美由紀　日付を見ると、襲われた日よりも前よ。（玲香に）あなた、その日突然襲われたみたいに言ってたけど、そうじゃないんじゃ

ないの？

玲香　そうじゃないって、……

美由紀　これ、塾の帰りじゃないの？　あなた、塾からまっすぐに帰らずに、こんな風に時間を潰してたんでしょう？

玲香　別にいいじゃない、公園のベンチに座るくらい。帰り道にあるんだから。勉強で疲れたんだから、一服したっていいでしょう？

美由紀　こういうこと、いつもしてたの？

玲香　……時々ね。

美由紀　じゃあ、襲われる前にも、俊太さんと会ってたんじゃないの？

玲香　まあ、初めてじゃなかったかもしれない。

健一　え、じゃあ、この前会った時、すぐに顔が分かったんじゃないのか？

玲香　初めてじゃなかったっていっても、二回目だったわ。夜で暗いから顔なんかよく分からなかったし。それに向こうから話しかけて、私はうなずくくらいで男の方はほとんど見てなかったのよ。

美由紀　うなずくって、相手をしてたっていうことじゃない。

玲香　まあ、そうかもしれない。別に変なこと言われたわけじゃないし。普通の会話だった。

美由紀　会話の内容とかどうでもいいわ。すぐに振り切って家に帰るもんでしょ、女の子なら。

健一　そうだな。そうしてくれた方が有難かったよ。

玲香　……帰りたくなかったよ。

美由紀　帰りたくなかった？　どうして？

玲香　だって、家に帰っても、ママとパパが喧嘩してたりするじゃない。パパが私に当たることもあったし。

美由紀　ああ、……そういうこと。

健一　（美由紀に）君が離婚する前の話か。

美由紀　そう。前の夫はDVを振るう人だった。私や子供にね。

健一　ああ、それはこれまでも聞いてる。

美由紀　（思いついたように）じゃあ、あなたが襲われたのは、私とパパのせいだって言うの？

玲香　そうは言ってない。……でも、そういう面もある。

健一　俊太が君を襲ったのも、俺のせいという面があるよ。

玲香　そうなの？

美由紀　さっき言ってたわね。その頃あなたと対立してたって。

健一　ああ、それに、あの頃俺は忙しくて帰りが遅いことが多かった。だから、俊太が夜出歩くことがあるのは知ってた。父一人子

一人の家だからな。

美由紀　そうね。……

やや間ができる。

美由紀　皮肉な話ね。そういうことがあったから、私たちは家族になれたのね。

健一　そういうことだよ。良かったのか悪かったのか。……いや、良かったと言ってはいけないのか。

玲香　……良かったんじゃないの？

美由紀　本当にそう思ってるの？

玲香　思ってる。……今の方がずっといい。あの頃より。

健一　そう言ってくれると嬉しいよ。

玲香　今が大事だから。

美由紀　でも、あなたは家を出て行く。

玲香　そう、それも含めてね。

健一と美由紀は何か言いたそうにするが、何も言わないまま。

5

――溶暗

数日後。場所は同じ。ダイニングテーブルの下手側の椅子に美由紀が腰掛け、上手ソファーに俊太が座っている。下手の椅子に玲香が座り、健一は舞台前方に立っている。

俊太　（平静な調子で）……それで、俺は何をすればいいのかな。交通費を出すっていうから、わざわざ来たんだけど。

健一　俺から言うまでもないと思うが。

俊太　俺はそれほど勘が良くないから、具体的に言ってくれないと分からないよ。

健一　勘が悪くても分かるんじゃないか。この状況に置かれれば。

俊太　もったいぶらないで、言ってくれよ。……まあ、玲香さんのことに関してだろうけど。

健一　分かってるじゃないか。

俊太　それで、土下座して詫びろっていうことかな。

俊太は玲香の方に眼を向けるが、玲香は黙ったまま。

俊太　まあ、俺も驚いたんだよ。俺が迫った相手が、自分の家族になってることに。

健一　それは、この前この家に来た時のことか？

俊太　いや、結婚式の写真を見た時だよ。俺は式に出なかったけど、父さんが送ってくれたじゃないか。家族の写真を。

健一　ああ、その写真を見てか。

俊太　そうだよ。写ってるのが、どうもその子に似てると思った。

美由紀　それで、ここに来たのか。

俊太　そういうことだよ。本当にその子か確認したかったし、そうだったら会ってみたかった。

健一　ずいぶん大胆だな。お前だってことが玲香ちゃんに分かったら、どういうことになるか、見当がつくだろうに。

俊太　見当はついたさ。

美由紀　それで、どうだったの？　玲香に会ってみて。

俊太　やっぱりこの子かって、思いました。

玲香　それは私も同じ。

俊太　でも、確信はなかったんだろう？　すぐに俺を問い詰めたりしなかった。

玲香　そりゃ、私はあなたの顔をはっきり見たわけじゃなかったし、あなたマスクして顔を隠してたし。

俊太　眼鏡もかけてた。

玲香　ああ、そうだった。でも、声の感じがそうだったし、ピンと来るものはあった。

俊太　じゃあ、もっと追い詰めれば良かったのに。

玲香　でも、あの時あなた否定したじゃない、結構強く。だからそれ以上追及できなかった。

俊太　ずいぶん慎重なんだな。

玲香　（椅子から立ち上がって）それだけ重大なことだからじゃない。私だと分かったんなら、あなたから打ち明けて詫びるべきだったんじゃないの？

俊太　そうだったんだろうな、一瞬そうしようと思った。俺が自分を襲った男に似てるって言われた時にな。……でも、できなかった。

玲香　どうして？

俊太　そうしたら、この家っていうか、家庭が壊れるような気がした。

健一　お前がそんなことを言う資格があるのか？

俊太　資格の問題って言うなら、あるんじゃないか？　俺は父さんの息子で、この新しい家族の一員だぜ。
健一　そんな風に思ってるのか。
美由紀　そう思ってくれてるのは嬉しいわね。
健一　じゃあ、どうしてスマホを納戸に置いていったんだ？　そんなことをしたら、自分のやったことが分かってしまう可能性が高くなるじゃないか。
俊太　そうだな。……分かってほしかったっていう部分はある。
美由紀　分かってほしかったって、何を？
俊太　俺が玲香さんを襲ったこと。……て言うか、俺が玲香さんを好きだったことかな。
美由紀　それは本当のこと？
俊太　ええ、本当です。
玲香　あなたに好かれたいなんて思ってないわ。
俊太　別にそう思ってくれてもいいよ。君に好かれるとは思ってないから。
健一　それは、お前が以前から玲香ちゃんを付け狙っていたということだな。
俊太　俺も同じ曜日に予備校に通ってた。それで、帰りの道で、玲

香さんを見かけることがあったんだ。公園のベンチに座ってた。
美由紀　何度もっていうこと？
俊太　そうですね、何度かそうしてるのを見かけた。
美由紀　（玲香に）やっぱり、ふらふらしてたんじゃない。
玲香　別にふらふらっていうわけじゃない。買い食いとかしてないし。
健一　塾の帰りに、ベンチで休むくらいは別にかまわないんじゃないか。（俊太に）それで目を付けたということか。
俊太　まあ、そうだな。どうして一人で座ってるのかなって思ってた。それに、やっぱり可愛い子だったし。
美由紀　それで玲香に近づいた。
俊太　そうですね。なんか話しかけたくなった。……でも、逆にちょっと驚いた。俺が近づいたら離れられるかと思ったら、意外に相手をしてくれた。
玲香　相手をしたってわけじゃない。はっきり言って、どうでもよかった。いてもいなくても。
美由紀　えらく投げやりね。
玲香　どうだろう。あの頃の私、どこにも居場所がなかったし。
美由紀　どういうこと？

玲香　家に帰っても、パパとママがしょっちゅう喧嘩してるし。私に手を上げられることもあったし。学校に行っても、気の合う友達もいないし。塾は行ってたけど、成績上がらないし。……演劇の部活くらいかな、ちょっと楽しかったのは。

美由紀　一つでもあればいいじゃない、楽しいことが。別に学校でいじめられたりしてたわけじゃないんでしょ？

玲香　それはない。むしろ弱い奴を見つけていじめてた。

それを聞いて皆ちょっと驚く。

美由紀　何、それ。あんたそんなことしてたの？

玲香　まあね、ストレス解消になるし。……だから、ベンチに近づいてくる男を見ても、変なことしたら殴ってやろうと思ってた。

俊太　それで、俺が近づいても避けなかったわけか。

玲香　そうね、いいカモが来たって感じだった。

俊太　そうかな。なんか淋しそうだったけど。一人でベンチに座って。

玲香　それはそう見えただけ。

俊太　君って、意外に武闘派なんだ。

玲香　部活でも身体鍛えてたからね。うちの高校の演劇部って、なんかやたらに身体トレーニングとかやらせるところだったから。

俊太　俺も子供の頃柔道やってたよ。

健一　すぐにやめたじゃないか。

俊太　二年は続けたよ。

美由紀　それはどうでもいいから。でも、二人で話してたんでしょう？　何を話してたの？玲香　何だろう、覚えてない。だいたい、俊太さんが話しかけて、私が相づちを打つだけだった。

俊太　相づちだけでもなかったな。なんでよくここに座ってるの、とか聞いたら、答えたじゃないか。

美由紀　なんて？

玲香　だから覚えてない。

俊太　時間をつぶしてるだけって、言ったよ。

玲香　そうだったかしら。

俊太　確かそうだよ。俺は覚えてる。

　このあたりで溶暗となり、数秒で上手ソファーにサスが当たると、俊太と玲香が並んで座っている。俊太はマスクをし、眼鏡をかけている。他の照明は落ちたまま。三年前の公園の場面の再現となる。

玲香はほとんど俊太の方を見ずにしゃべる。

俊太　なんで時間をつぶしてるの？

玲香　家に帰りたくないから。

俊太　家はつまらない？

玲香　まあね。

俊太　俺も同じかな。……塾の帰りとか？

玲香　（無言でうなずく）

俊太　俺も予備校帰り。受験勉強って、つまんないよな。

玲香　（無言でうなずく）

俊太　でも、勉強しないと、ひどいことになるって言われてるよな。

玲香　誰に？

俊太　親とか、教師とかさ。

玲香　親はクソよ。

俊太　へえ、クソな親なのか。だから家に帰りたくないのか。

玲香　あんたの親はクソじゃないの？

俊太　クソと言えばクソかな。……でも、親なんてみんなそうだよ。

玲香　あんたもそうよ。

俊太　え、俺が？

玲香　そうよ、クソ。あっちに行って。
俊太　君にクソと言われる筋合いはないな。
玲香　どういう筋合いならあるのよ。
俊太　俺と仲良くするっていう筋合いならある。
玲香　バカじゃないの。
俊太　バカじゃないのと言われれば、そうだろうね。……俺はバカだよ。
玲香　よく分かってるじゃない。
俊太　バカだからこんなこともするんだよ。

俊太は隣の玲香に抱きつこうとする。

玲香　なにすんのよ。このクソバカが。

玲香は押し返そうとするが、俊太の力が強くて、ソファー上に押し倒される。しかし全力で俊太をはねのける。その拍子に俊太のポケットのスマホが飛び出して床に叩きつけられる。俊太はそれを取り上げてすばやくポケットにしまい、暗転となる。（演出的に難しければスマホの落下はなくてもよい）

数秒後に明転すると、俊太、玲香は元の姿、位置に戻っている。

美由紀　ふーん。そんなことがあったのか。

俊太　俺の覚えている限りですが。

健一　お前、なんてことをしてくれたんだ。すぐに玲香ちゃんに謝れ。

美由紀　でも、玲香もひどいこと言ったみたいじゃない、俊太さんに。

健一　だとしても、そんなことしていいっていうことにはならない。

俊太　確かにそうだな。（立ち上がって、玲香に）悪いことをしたよ。申し訳ない。（と頭を下げる）

玲香　（無言）……。

美由紀　許してあげたら？　あなたも悪いところがないってわけじゃないし。

玲香　私に悪いところはない。

美由紀　でも、そもそもあなたが塾からまっすぐに家に帰らなかったのが悪いんじゃない。

玲香　だから、そういう家じゃなかったって言ったじゃない。

美由紀　そういう家？

玲香　そうよ。帰りたくない家にしてたのは、ママとパパだったじゃない。

美由紀　人のせいにしないで。どんな家であろうが、夜女の子が一人でふらふらしていいわけないでしょう。

玲香　だから、ふらふらしてたんじゃない。……もういい。どうせもうママとは暮らさないから。これからは私一人で生きていくわ。

玲香は下手の椅子近くに置いてあるバッグを持って下手に退場する。美由紀も健一もその勢いに押されたように、何も言うことができない。

美由紀　仕方ないわね。前から下宿したいって言ってたし。

俊太　……それで、俺の件はこれで片付いたっていうことかな？

美由紀　どうだろう。結局あの子、あなたを咎めなかったわね。

健一　今から咎めてもって、思ったのかもしれないな。

美由紀　まあ話を聞く限り、通り魔的に襲われたんでもないし、それにあの子の方でもやる気まんまんだったみたいじゃない。

俊太　俺としては、もっと咎めてもらっても良かったんだけどな。その方がすっきりする。

美由紀　罪悪感が薄れるっていうこと？
俊太　まあ、そういうことかな。俺は悪いことしたと思ってるから。そういう奴が家族にいるのは良くないだろ。
美由紀　そう思ってくれてるの？
俊太　ええ、まあ。……ここにいる人と一緒に暮らさないのは、俺も同じだけど。
健一　つまり、けじめをつける意味でスマホを納戸に置いたってことか？
俊太　いや、別にそんな風に思ったわけじゃないけど。でも、見つけられたら、そんな風になると思って置いた。
健一　それで、思い通りに進んだってことか。
俊太　いや、もっとひどいことになると思ってたよ。下手したら警察に突き出されるとか。
美由紀　誰が警察に突き出すの？
俊太　玲香さんが。
美由紀　そんなこと無理よ。だって証拠がないし、その程度のことに警察が取り合うわけないわ。それに、玲香にそんなことさせない。
俊太　俺のことかばってくれるんですね。

美由紀　あなたのことって言うか、家族のことよ。……あなたも家族だから。

俊太　そんな風に思ってくれてるんだ。

美由紀　今あなたもそう言ったじゃない。

俊太　ああ、そうかな。

健一　そういうことだよ。でも、なんで玲香ちゃんにそんなことをしたんだ？

俊太　どうしてだろう。……まあ、クソとかバカとか言われてかっとしたところはある。でも、それはきっかけだな。理由じゃない。……あまり言いたくないこともある。

健一　なんだ、言いたくないことって？　何言ってもかまわないぞ。

俊太　あの頃、親父が受験のこととか、色々口出ししてたじゃないか。自分でも分かってるだろう？

健一　ああ。そのことは美由紀とも話したよ。でも、それが女の子を襲う理由にはならんぞ。

俊太　そうだな。……理由は、玲香さんに近づきたかったからかな。

美由紀　その日の前から、玲香の写真とか撮ってたんでしょ？

俊太　ええ。……玲香さん、死んだ母親に割と似てるんですよ。それで、初めて見た時から気になってた。

健一　それは俺も思った。真奈美の若い頃に似てるなって。
美由紀　前の奥さん、真奈美さんっていうのね。初めて知ったわ。

その時、上手から祐司が登場する。

祐司　なんだ、お前、結局マザコンのレイプ野郎だったってことかよ。
美由紀　祐ちゃん、話を聞いてたの？
祐司　聞いてたっていうか、聞こえてたよ。
俊太　だったら、どうなんだ？
祐司　そんな奴と家族になりたくないな。
俊太　そう思ってもらってもいいさ。どうせ俺が君たちと一緒に暮らすことはないよ。
祐司　でも、俺とお前は一応兄弟っていうことになるんだろ。それは嫌だよ。妹を襲った奴が兄弟なんて、考えただけでおぞましい。
美由紀　ちょっと冷静になってよ。玲香だってそんなこと言わなかったのに。
祐司　言わなくても思ってるよ。
美由紀　思ってたって言わなければ認めたってことじゃない。

祐司　それは欺瞞じゃないか。だましだよ。
美由紀　じゃあ、どうしたいって言うの？
祐司　俺は母さんとこの人の結婚に反対だよ。
美由紀　今さら何言ってるの。私たちもう結婚してるのよ。
健一　君の気持ちは分かるが、ちょっと大人になってくれないか。
祐司　俺はあの夜玲香が帰って来た時のことを忘れないよ。本当に震えて、泣いてた。母さんは知らないだろうけど。
美由紀　あの日は仕事で遅くなったから。
祐司　そうやって自分のことしか考えてなかったじゃないか。
美由紀　あの子はもう十七だったわ。小学生じゃなかった。
祐司　子供なのは変わらない。
美由紀　高校二年生なら、どう過ごすべきか分かるはずじゃない。
　でもあの子はそうしなかった。
祐司　母さんはどうして玲香に冷たいんだ？
美由紀　冷たいわけじゃない。大人と思ってるのよ。それはあなただって同じ。
祐司　高校生は大人じゃないだろう。
美由紀　大人として振る舞ってほしかったの。父親に頼れない、あいう家庭だったから。それにあなたが大学へ行けたのは、私が

そうやって働いてたからじゃない。

祐司　まあ、それはそうだけど。

美由紀　あなたの前のお父さんはひどい人だったわ。仕事はちゃんとしてたけど。家族にすぐ手を上げたし、浮気もしてた。そんなお父さんといた方が良かったの？

祐司　そんなこと言ってないじゃないか。前の父さんといるのは嫌だったよ。玲香の方がもっとそうだったんだろうな。だから、……

美由紀　そういうことよ。

祐司　それは、玲香がこいつに襲われたのは不可抗力だったっていうこと？

美由紀　別にそこまで俊太さんの肩を持つつもりはないわ。……私は、健一さんと会えて本当に良かったと思ってる。これからずっと一人で子供二人を支えていくと思ってたから、パートナーができて嬉しかった。（少し涙ぐむ）でも、それは俊太さんのおかげなのよ。まあ、おかげって言うのは良くないんだろうけど。だから、どうしても俊太さんを悪く思えないの。

俊太　別にそんな風に思ってもらわなくてもいいよ。

俊太はソファーから立ち上がって、前へ出、祐司と向き合う。

俊太　君にあんな風に言ってもらって、良かった。玲香さんとは、
　なんか消化不良だったから。
祐司　もっと罵った方がいいのか？
俊太　そうしてくれてもいいよ。

　祐司は何かを言いかけるものの、無言のまま。

俊太　君は妹思いなんだな。俺は一人っ子だから、そういう感情は
　分からないけど。
祐司　お前はマザコンじゃないのか。
俊太　そうかもな。母親は早く亡くなったし、俺のこと可愛がって
　くれたからね。俺はまだ中学生だったし。
健一　俺もお前を大事に育てたぞ。
俊太　そうだったのかな。むしろかまいすぎみたいに思ってたけど。
健一　それは子供がお前一人だったからだ。
美由紀　今は一人じゃないわ。
健一　そうだ、今は三人いる。
祐司　俺は、あなたの子供になりたくない。

健一　それは、俺が俊太の親だからか？
祐司　それもある。でも、母さんとあなたが夫婦になったのは、自分たちだけの都合だろう？
健一　でも、君も反対はしなかったんだろう？
祐司　事前にはね。でも、こうして一緒に暮らし始めると、やっぱりおかしいと思う。
美由紀　それは仕方ないわ。これまで違う家族だったものが一緒になったんだから。そのうち慣れるわよ。
祐司　慣れの問題なのか？　俊太みたいなまともじゃない奴が兄弟になるんだぞ。
美由紀　前のお父さんはまともな人だったの？
祐司　それは違うな。
美由紀　でも、一緒に暮らしてた。それに、俊太さんはまともな人だわ。玲香にああいうことをしちゃったのは、そりゃ悪いけど、誰だって足を踏み外すことはあるわ。
健一　そう言ってもらえると有難い。俺は俊太を弁護できる立場じゃないから。
美由紀　私は、俊太さんの母親になりたいと思ってる。
祐司　そうしないと、この人の奥さんになれないからだろ？

美由紀　そうだけど、それのどこが悪いの？　家族って、色んなものがついてくるのよ。選り好みしてられないわ。

祐司　俺は嫌なものは嫌という方だから。

美由紀　でも、あなたここにいるわ。そう思うんなら、玲香みたいにさっさと家を出りゃいいじゃない。

祐司　あと半年で出るよ、どうせ卒業して就職なんんだから。

俊太　俺はもうこの家には来ないよ。だから君にももう会わない。

祐司　でも家族ではいつづけるんだよな。

俊太　それは、俺が君の家族だって認めたことになるじゃないか。

祐司　（やや苦しそうに）そんなことない。……俺は認めてないさ。お前も、お前の父さんと俺の母さんの結婚もな。

美由紀　そうかしら。あなた、まともな父親と、まともな家庭がほしいって言ってたじゃない。

祐司　このままで、まともな家庭になるのか？

美由紀　なると思うわ。……それに、家庭なんてそれぞれなんだから。

健一　そういうことだよ。君が言ったように、そのうちこの家に暮らすのは俺と美由紀だけになる。でも、君や俊太や、玲香ちゃんが、安心して帰って来れる場所になる。

美由紀　そうなるといいわね。これまでがそういう家庭じゃなかったから。

祐司　家って、家族が一緒に暮らす場所じゃないのか？　帰ってくるだけなら、ただの箱じゃないか。

健一　ただの箱でも、俺たちが共有する箱だよ。それに君とは、少なくとも卒業まではこの箱の空間を分け合えるじゃないか。

祐司　俺は別に共有したくないけど。……母さんたちがそうしたければ、そうすればいいさ。

健一　俺は、君のまともな父親になれそうか？

祐司　前の父親に比べれば、まともだよ。

健一　そうか、良かったよ。じゃあ、俺のことをあなたじゃなくて、父さんと呼んでくれないか。これまでも、時々そう呼んでくれたじゃないか。

祐司　……分かったよ、父さん。

健一　有難う、祐司。よろしくな。

健一は祐司に近づき、握手をする。

美由紀　（立ち上がって、俊太に）じゃあ、あなたは、私のことを

母さんと呼んでくれるかな？　まだそう呼ばれたことない。

俊太　俺には死んだ母さんしか母さんはいないんだけど。……でも、母さんと呼ぶよ。それで、少しでも詫びることになれば。

美由紀　有難う。

俊太　じゃあ、俺はこれで失礼するよ。今日中に名古屋に帰りたいから。

俊太は置いてあったカバンを取って、下手に退場しようとする。

健一　とんぼ返りか？

俊太　ああ、やっぱり俺には狭い下宿の方が居心地がいいよ。

祐司　もうお前に会うことはないのかな。

俊太　多分ね。

健一　そんなことはないぞ。社会人になったって、いくらでも会う機会はあるだろう。

美由紀　もう会わないとか、寂しいこと言わないでよ。

祐司　家族なんて、そんなもんだよ。ずっと一緒にいるわけじゃない。……ところで、俺も母さんも思ってたことだけど、お前が名古屋の大学に行ったのは、玲香とのことから逃げるためじゃない

のか？

健一　ああ、それは俺も知りたい。

俊太　どうだろう。そう思いたいなら、それでいいよ。今の玲香さんと同じで、俺も親から離れて暮らしたかった。玲香さんとのことがあって、余計にそう思うようになった。そういうことだよ。

祐司　それは、認めるってことだな。

俊太　だから、そうだって言ってる。

祐司　そうか、分かった。じゃあ、餞別にこれをやるよ。

と言って、祐司は俊太にパンチを食らわせる。俊太は不意を食らってその場に倒れる。

美由紀　祐ちゃん、何するのよ。

健一　大丈夫か？

俊太　（すぐに立ち上がって）大丈夫だよ。まあ、君がここに現れてから、こういうことするんじゃないかと思ってた。

祐司　玲香の代わりだよ。悪く思うな。

俊太　これで俺もすっきり名古屋に戻れるよ。玲香さんによろしくな。このことも伝えておいてくれ。

祐司　分かったよ。
俊太　じゃあ、みんな元気で。
健一　お前もな。
美由紀　あなたも。

俊太はカバンを持ち、ドアを開け、下手から退場する。

祐司　俺も部屋へ戻るよ。

そう言って祐司は上手に退場する。

健一　これで落ち着くといいな。
美由紀　そうね。みんなが集まって、色々あって、私たちが残って。今日はまるで人生の縮図ね。
健一　そうみたいだな。でも、家族がこれで確定というわけでもない。
美由紀　（椅子から立ち上がって）え、何。あなた私に子供を産ませるつもり？
健一　できないことないだろう？

美由紀　いや、もう無理だと思うけど。
健一　何ごともチャレンジだぜ。
美由紀　無謀じゃないの？
健一　さあ、どうかな。どうだ、今夜あたり？
美由紀　まあ、考えとくわ。

美由紀はそれでも微笑みながら上手に退場していく。健一は一人取り残されながらも、満たされたような表情を浮べる。

――幕